

—湾岸・アラビア半島地域ニュース—

サウジの対イラン観

平成 25 年度中東情勢研究会第 2 回会合

開催日時：平成 25 年 8 月 6 日（火）18 時～20 時、於：中東調査会

報告者：高尾賢一郎（同志社大学大学院）

報告題目：特定の某国—サウディアラビアにとってのイラン

出席者：錦田愛子（東京外国語大学助教）、その他 9 名、中東調査会：山崎、高岡

概要

* 高尾より、要旨以下のとおり報告した。

1. サウジはアラブ・スンナ派イスラーム世界の主流・盟主を自認し、近隣諸国やアメリカと強固な軍事・経済協力関係を持つ。そのサウジにとって、イランは非アラブ、シーア派との属性と、近隣諸国やアメリカとの緊張関係を抱える存在であり、イデオロギーや国際関係上、イランに対する批判・非難の材料が多い。しかし、サウジとイランとの関係は、直接的な対決ではなく、周辺諸国を舞台とする影響力の拡大競争を中心として展開してきた上、イスラーム世界の中心であるとのイメージ作りを戦略としてきたサウジにとって、政府レベルでの対イラン批判には一定の配慮がなされてきた。

2. サウジによる対イラン批判に一定の配慮がされている例としてシーア派住民による抗議行動や暴動がたびたび発生している東部州の情勢についてのサウジの反応がある。サウジは東部州の情勢について、同地域のシーア派住民への差別待遇や彼らの不満をその原因とする「内憂」と考えるのではなく、この問題を外部からの攻撃、すなわち「外患」と認識して対応している。このため、サウジ政府は東部州の抗議行動発生地域への外国報道機関の入域を規制する一方、自らはこの問題に直接言及することを回避し、宗教界に「海外から暴動を扇動した者」を批判させるという対応をとった。「海外から暴動を扇動した者」に類する表現は東部州の情勢を語る上でのみ用いられるもので、社会的には「イラン」と認識されているが、それでもサウジ政府や宗教界はイランを名指しして非難することを回避している。類似の対応は、2011 年のバハレーンでのデモとこれを鎮圧するためにサウジなどが出兵した際にも用いられた。

3. 一方、先般のイランの大統領選挙のようにサウジ政府が直接イランに言及してイランに対す

る意見・感情を表出しなくてはならない場面も存在する。イランの大統領選挙とその後の情勢についてのアブドラー国王の発言やサウジの報道、これらに対してインターネット上で寄せられたコメントを材料にしてサウジの対イラン観について分析する。考察の材料とした発言・報道・コメントには、ロウハーニ大統領についての論評、イラク情勢、シリア情勢、核開発などについての批判・要求が見られたものの、東部州問題についての言及が無かったことから、サウジ領内で発生する問題については直接イランを名指ししない/できないという行動様式があるのではないか。

* 質疑では、今回の報告で取り上げた事例は、メディア論で言う「ホワイトプロパガンダ」（根拠を明確にした宣伝）と「ブラックプロパガンダ」（誹謗・中傷も含む根拠を明確にしない宣伝）という分析枠組みを用いて論じることができるのではないかと指摘があった。また、東部州問題はサウジとイランとの地域的な影響力獲得競争の中で争点・カードになりうるものであるにもかかわらず、なぜサウジ政府はこの問題をイランとの影響力獲得競争の文脈で反応しないのか、との質問に対し、高尾よりサウジ政府としては「東部州問題をイランとの間の話題にしない」という対処戦略をとり争点化させないことを意図しているのではないかと回答した。

(了)

◎本「かわら版」の許可なき複製、転送、引用はご遠慮ください。

ご質問・お問合せ先 公益財団法人中東調査会 TEL:03-3371-5798、FAX:03-3371-5799